

## 資 料

# パ リ

—— 誕生から現代まで ——

[XXIX]

P. クール ティ ヨ ン 著  
金 柿 宏 典\* 訳注

## 第 3 共和政（4）

## 芸術的生活

19 世紀末は、フロベールとモーパッサン<sup>1)</sup>に続いて、ロマネスクな才能を復活させる。第 2 帝政時代の一家族の歴史であるルゴン・マッカール叢書全 20 巻の中で、エミール・ゾラ<sup>2)</sup>は一連のパリの「光景」tableaux を描いている。『居酒屋』*L'Assommoir*<sup>3)</sup> は社会の最下層と酒場の小説である。『パリの胃袋』*Le Ventre de Paris*<sup>4)</sup> は我々を中央市場に連れて行ってくれるが、そこでは使い走りの小僧のカップルが果物や野菜の山の中で生活している。『制作』*L'Oeuvre*<sup>5)</sup> は印象主義時代の画家たちを描いている。最後にデパート『奥様方の幸福』<sup>6)</sup> *Au Bonheur des dames* で、『ジェルミナル』<sup>7)</sup> *Germinal* の作者は新奇なデパートの活動を示す。

しかしより強く世紀末のパリ市民の精神が表現されているのは、まちがいなく劇場である。当時の気分を示す劇作、『退屈な社交界』*le Monde où l'on s'ennuie* でパイユロン<sup>8)</sup> は、アカデミックで学術的なサロンの情景を提示している。『パリの女性』*la Parisienne* で、アンリ・ベック<sup>9)</sup> は辛口で辛辣で時折無慈悲ともいえる皮肉でもって、男を鼻面を

\* 福岡大学名誉教授

掴んで引き回すため多くの手練手管を弄する女性の肖像を創作している。

最後に、この時期は、シャブリエ<sup>10)</sup>とフォーレ<sup>11)</sup>を除き、全員がパリ生れかその郊外の出身である音楽家たちにとっても他の芸術家にとっても同様に好適な時代であった。ビゼー<sup>12)</sup>は『カルメン』*Carmen*を作曲するが、輝かしい勝利の前、初演(1875.3.3.)は惨めな失敗だったのである。デュパルク<sup>13)</sup>とショーンソン<sup>14)</sup>は交響楽の詩を出し、デュカ<sup>15)</sup>は『魔法使の弟子』*l'Apprenti sorcier*を作曲。ドビュッシー<sup>16)</sup>は『牧神の午後への前奏曲』*le Prélude à l'après-midi d'un faune*を発表した。

アングロ・サクソンの血を引くアンリ・ベルグソン<sup>17)</sup>は『意識の直接所与についての試論』*l'Essai sur les données immédiates de la conscience*により、細密な思索と驚くべき鋭敏な文体で我々を空間の知覚と記憶の現象にいざない、我々の時間の観念を覆したのである。

## 大発見

科学に関しても、発明と発見に関して、これほど豊かな事はかつて無かった。

コレージュ・ド・フランスやパリ国立博物館で、クロード・ベルナル<sup>18)</sup>は実験医学の教育を独創し、それぞれの事実が創意に満ちた一連の経験の対象になる(解剖学に加えられた生体解剖、生体実験)。彼と共に、特殊症状の研究、先入見の拒否という全き手法が確立し、知識を豊富にしていく。この偉大な生理学者は一つの説明を十分に吟味した後でしかその説明をしなかった。かくして彼は肝臓のグリコーゲン形成機能を証明し、この器官の作用と内分泌腺の特性を啓示し総括した。

1889年、ジュラ出身の短い口髭の固い先端をとがらせたルイ・パストゥール<sup>19)</sup>が、デュト街<sup>20)</sup>で自分の名を冠した研究所を開設した。「ナポレオンと並んで最も有名なフランス人」と言われた彼は、培養、ヴィールス、無菌法、ワクチンの増殖などの仕事により、また狂犬病予防のワクチンにより、全世界の尊敬を集めていた。真の謙虚さ —— 狂人たちと交わる事さえ恐れぬ謙虚さ —— の持つ活力に溢れた生物学者でも医者でもないこの人物は、生物学と医学に革命を起したのである。

パストゥールは「馬鹿気た対立により我々を興奮させる」政治を嫌悪していた。彼にとり、パリ・コミューヌの日々は「パリの乱痴気騒ぎ」だった。「国家の中で個人を消滅させる」事を彼は拒否し、物質主義を破棄している。

1857年以降、実験所もなくなった彼は小さな粗末な家で、無限に小さいもの、微生物の世界について研究を続けて、人類を絶滅するための新しい方法を毎日想像している「血と死の法則」に反対し、「人類を襲う災厄から人類を守ることを目的とした、平和と労働と救いの法則」のみを考えていたのである。

ヴォジラール街<sup>21)</sup>とアサ街<sup>22)</sup>の交叉点にあるアンスティチュ・カトリックの古いカルメル派の修道院の構内で、貧弱な灯火の下の机に坐り、粗末な机の上で自分の手で製作した装置を使い、実験をしていた人物こそブランリ<sup>23)</sup>であった。(ジャンドロン助手の協力を得て)、彼は火花をたてると「火花ギャップ」*eclateur*と「検流器」*galvanomètre*の間にパチパチという音が生じるのを見た。そしてまた振動が放電箱から次の放電箱に連続して繰り返され、ガラス管の中ではもっと離れても生じる事に気付いた。こうして無線電信T.S.F.が発見されたのである。

慎重な言葉遣いをし、夢想的で明るい瞳を持つ長身のパリ生れの人物ピエール・キュリー<sup>24)</sup>は弟と共に多くの仕事(特に磁気的特性)をした後にマリ・スクロドブスカ<sup>25)</sup>と結婚した。彼女はポーランド人の女子学生で、尖った顎の角ばった顔を持ち、金髪の下にグレーの目を光らせていた。彼女はケレルマン大通り<sup>26)</sup>に引っ越して夫の実験室で働く前まで、ラ・グラシエール街<sup>27)</sup>の寄宿舎で暮していた。

放射能を発見したばかりのベクレル<sup>28)</sup>に続いて、二人はロモン街<sup>29)</sup>の設備もない粗末なバラックで共同研究を遂行する。そこで二人は「瀝青ウラン」(ウラニウムの自然酸化物)を多量に扱わねばならなかった。毎朝二人は粗末な上っ張り着て、ポケットにノートをしこたま詰め込んで、このバラックにやって来た。遂にピエールとマリ・キュリー夫妻は、「ポロニウム」とベモンの協力により「ラジウム」(1898年12月)という2つの新しい放射能元素を発見し、また同じく9種類の放射能の持つアイソトープも発見したのである。

また次のような人たちも語っておくべきだろう。天文学を完成させたジャンセン<sup>30)</sup>、外科医のペアン<sup>31)</sup>、彼はあらゆる公的關係から独立して、全世界の貧しい人々のための国際的病院をラ・サンテ街<sup>32)</sup>に開設した。カラー写真の技法を開発したリップマン<sup>33)</sup>、リュミエール兄弟<sup>34)</sup>は、1895年1月28日土曜日、パリのカフェで『水を撒く散水車』*l'Arroseur arrosé*という最初の映画を上映したが、これがメリエスの努力により映画に発展するのである。

## モード

オッフェンバックの軽快な曲の流れを汲む軽音楽やリフレインの第2帝政時代に逆行した後、(当時はジュネーヴの十字と呼ばれていた)赤十字を腕につけた地味な服装をした数人の看護師によりもたらされたモードが、プロシャ兵の行進やパリ・コミューヌの後に、ドイツ風の大きなブラウスや尖った帽子やたっぷり布を使ったスカートに取って代った。次に、再びパッスル(スカートにふくらみをつける腰当て)が採用される。——これは女性たちがスカートの下に腰にあててスカートをふくらます馬の尾の毛で作った小さなパニエである。この服装でマジャンタ公夫人は夫のマク・マオン元帥<sup>36)</sup>と共にエリゼ宮に客を招待し、ジムナーズ劇場<sup>36)</sup>ではメイヤックとアレヴィ共作の作品が上演されていたのである。1878年の万国博覧会の後、ボディー部分は長く細くなり、体にびったりあった服のため歩幅が狭められた。肉体は窮屈な服の中に閉じこめられた。優雅な女性は大変に小股で歩いたので、布地の漣の上に小さな石碑を形成しているようだった。当時、額にゆれる前髪をたらしすが、髪はカールせずに真っ直に垂らし、眉毛の上でぎざぎざになるように櫛を入れていた。これを「犬のような」(前髪を額にたらしした)髪形といった。再びパッスルが流行のきざしをみせた。それは軽いふくらみをつけるパニエから始まり、1885年に出現する。女性たちはそれにリボンや蝶結びをつける。要するに、「そこに食卓を整える」ことになるのだった。

男性は絹や縁取りのある襟のついたフロックコートや燕尾服や背広を着た。それらは口の広がったカラーをつけ、緩く結んだネクタイや先の折れた取りはずしの出来る襟アタッチドカラーをつけ、エドモン・ロスタン<sup>37)</sup>が見せびらかしたようにプラストロン(男子用シャツのいか胸)飾りのネクタイをしていた。

社交界にとり、市役所のダンス・パーティーがマク・マオン主催のチュイルリ宮のパーティーに代った。市役所のパーティーには、小売商の旦那連や中央市場のかみさんたちが大挙してして押しかけた。踊りながら、彼らはパナマ運河会社<sup>38)</sup>やウイルソン事件により生じる大暴落に先立つ経済界の醜聞を話題にした。ウイルソンはグレヴィー大統領の女婿だった代議士で、(当時の人たちが「がらくた勲章」と呼んでいた)レジオン・ドヌール十字勲章を欺され易い人々に高値で売っていた。パリではすべてが歌で終るように、市民たちはウィンクを交しながら口ずさむのである。

ああ！ 婿を持つなんて大災難だよ！

これより少し後の1897年5月4日、オテル・デュ・バレ周辺で、大火事がチャリティー・バザー<sup>39)</sup>を主催していた御夫人たちや購売者たちを猛然と急襲したのである。4日後、ノートル・ダムで、150名の犠牲者の弔花で飾られた棺の前で、オリヴィエ神父が説教をした。内相バルトゥー<sup>40)</sup>も演説をした。しかしこの事はレオン・ブロワ<sup>41)</sup>が自分の『新聞』*Journal*紙上で、これらの裕福な慈善家たちを「不快な乞食」と嘲弄するのを止められなかったのである。

(続　く)

バ　　リ

—— 誕生から現代まで ——

(訳 注 XXIX)

1) Henri René Albert Guy de Maupassant (1850–1893) : ノルマンディーのフェカン生れ。母の友人で名付親でもあったフロベールに師事して、懇切な文学的指導をうけた。普仏戦争(1870–71)に従軍、短いが強烈な戦争体験をし、帰還後は約10年ほど海軍省と文部省に勤務、役人生活を送る間にパリ市民の日常を観察している。1875年頃から作品を雑誌や新聞に発表し始めるが、彼の文名を一躍高からしめたものは、知遇を得たゾラの主宰した戦争を主題にした作品集『メダンの夕べ』*Soirée de Médan* に発表した『脂肪の塊』*Boule de suif* (1880) である。これ以後は流行作家となり、多くの新聞雑誌に、中、短篇310本あまり、長篇6本、旅行記3巻、評論、コラムなど200本あまりと健筆を揮った。正確簡潔な文体で、小市民や農民など庶民の心理の襲を微細に描写し、特に短篇小説の名手としてこのジャンルの確立者といわれる。頑健な体躯に恵まれた彼だったが、若い時の放蕩がたたって梅毒に感染、晩年は幻覚に襲われ、遂に精神病院で狂死した。代表作は短篇集『メゾン・テリエ』*La Maison Tellier* (1881)、『月光』*Clair de lune* (1884)、長篇では『女の一生』*Une vie* (1883)、『ベラミ』*Bel ami* (1885)、旅行記には『水の上』*Sur l'eau* (1888) などがあげられよう。

2) Emile Zola (1840–1902) : 父はイタリア人の土木技師、母はパリ近郊の出身で、ゾラはパリで生れ、父の仕事の関係で南仏エクス・アン・プロヴァンスで幼少時代を過した。父の死(1847)により困窮した一家はパリに移転、生活苦のため学業を諦めて彼はアシェット書店に務めた(1862)。ここで文壇の実態に触れ、写実主義から自然主義へ文学思潮が変っていく事を知った。彼はそれまでのロマン的な作品から脱却、はじめて自然主義的作品『テレーズ・ラカン』*Thérèse Raquin* (1867) を発表し注目され、文壇へのデビューを果たした。当時大いに発展した自然科学や医学の成果に啓発され、人間観察は性格でなく体質を重視し、人間性の探究は主観的な観察からの描写ではなく、科学的客観的理論による実験記録としなければならないと確信した。彼はこの信念を作品にしようとして、第2帝政下の一家族の遺伝的体質の変遷と社会的歴史を描くための叢書『ルゴン・マッカール一家』*Les Rougon-Macquart* に着手、第1巻『ルゴン家の運命』*Le Fortune des Rougon* を発表した。これは南仏の架空の土地ブラッサン出身のルゴンとマッカールの2

家系の結合から生れる子孫たちが第2帝政時代の社会の各層に進出して辿る運命を描くという野心的な企てで、バルザックの『人間喜劇』に対抗するものである。最初は全10巻の予定だったが執筆するうちに生長し、結局最終巻は当初の計画の2倍の全20巻になった。最終巻は『パスカル博士』*Docteur Pascal* (1893)である。ゾラはこの完結篇の中で、パスカル博士が一族の人々の事例を研究し、遺伝の法則を解明、自分の姪クロチルドが生む自分たちの子供に未来を托して安らかに死んでいく姿を描いている。

叢書の最初の作品は、出版される度に、その不道性を烈しく非難されていたが、第7作の『居酒屋』*L'Assommoir* (1877)に至り、パリの場末の労働者階級の悲惨な貧困、道徳的退廃、アルコール中毒の悲劇が圧倒的迫力で読者を感動させ、作者ゾラをして自然主義文学のリーダーたらしめた。経済的余裕のできた彼はパリ近郊のセヌ河畔の地メダンに別荘を購入、フロベールが毎週日曜の午後に開く懇談会にならい、モーパッサン、ユイスマンス、アレクシらの青年作家を招いた。これはゾラがサン・ジョルジュ街に住んでいた時、毎週木曜日に開いていた木曜会の延長である。この集いから『メダンの夕べ』と題する参加者の短篇集が刊行され、モーパッサンが文壇に登場したのは前述の通りである。

しかしながら『ルゴン・マッカール』の叢書が完結する頃、時代の趨勢は変化し、科学万能の実証主義思想や政治的には共和政に対する攻撃が激化する反動が文学面にも抬頭し、自然主義は退潮に向っていく。ゾラもこの頃から徐々に自然主義から離脱し、科学の進歩を信じると同時に、社会改良が実現し、労働者や一般民衆もやがてより幸福な生活を享受できるだろう、という楽天主義者に変貌していった。実証主義の正当性を確信しつつも、より内面的かつ観念的な連作『三都市』*Les Trois Villes* (1894-98)や『4福音書』*Les Quatre Evangiles* (1899-1903)を創作した。また人権を守るため、ドレフェス事件に敢然として立ち上り、有罪判決にも屈せず、不幸なユダヤ人将校を守り抜いた。1902年9月29日、メダンからパリの自宅に帰った夜、就眠中に部屋の暖炉の不完全燃焼によるガス中毒で死亡した。62歳だった。10月2日のモンマルトルの墓地の葬儀にはアナトール・フランスが弔辞を述べた。1808年6月4日、ゾラの遺骸はパンテオンに移送され、盛大な国葬が挙行された。恩人の葬儀にドレフェス大尉も出席したが、右翼の暴漢に襲われ、腕を銃撃された。クレマンソーがゾラの勇気と自由の精神を賞賛する弔辞を述べた。彼はユゴーと同じ墓室に眠っている。

3) *L'Assommoir* (1877)：ルゴン・マッカール叢書の第7巻として発表された作品で、ゾラの文名を一躍高めると共に自然主義文学の勝利を文壇のみならず社会全体に宣言し公

認させた記念碑的傑作として、文学史的には、ロマン主義の成立と勝利を確立したユゴーの劇作『エルナニ』に比肩する著作である。洗濯女ジェルヴェーズが勤勉な努力により、洗濯屋の店を持つまでに成功するが、実直な夫のクーポーが事故から障害者となり、酒に溺れるアル中患者になるにつれ、店の金を盗んで居酒屋に入り浸る。このため彼女の店も倒産、絶望したジェルヴェーズも酒に逃避し、遂には屋根裏で餓死する。パリの場末の下町に展開する職人たちの貧乏で悲惨な実生活を活写したこの作品は、不道徳としてブルジョワ階級から攻撃され、労働者側からも、このような低劣な人間ばかりではない、誠実で真面目な労働者を侮辱するものだ、と非難された。しかし、当時の大都会パリの諸相を適確に描き、登場人物を躍動させて、19世紀フランスの一断面を活写した事で、この作品はゾラの傑作という評価は決定している。Assommoir は牛馬を殺す「屠殺用の斧」で、作中の居酒屋の看板として店頭飾られていたものだが、この語が何時の間にか「場末の居酒屋」の意味になった。

4) *Le Ventre de Paris* (1873)：叢書の第3巻として出版された。今は郊外に移転し、跡地に商業施設などが建設されて、繁華街になっているが、起源は古く、1110年頃、フィリップ・オーギュストにより設置された市場の後身であるパリ中央市場が舞台になっている。パリ市民の胃袋を満たすあらゆる食糧品が売買されるこの市場の渦の中で、果物や花や野菜や鮮魚の山の間で、懸命に働く若年労働者たちを描いている。大都会に供給される膨大な食料品の細密な記述を背景に、花売り娘カディヌ、果物屋の売子ラ・サリエットらの姿が感動的に浮び上る。

5) *L'Oeuvre* (1886)：叢書第14巻の作品で、主人公の画家クロード・ランティエの創造の苦闘をかりて、ゾラ自身の作家としての創作のための努力と苦心を描いたもの。ゾラはこの作品に着手する前に、同じ画家の苦闘を描いたバルザックの『知られざる傑作』*Le Chef-d'oeuvre inconnu* を熟読して参考にしたと推測される。

ゾラ自身も友人の手紙の中で告白しているように、この作品の主人公クロードには、彼の青春の牧歌的な日々の回想を語らせているが、もう一人の人物にも投影されている。それはゾラの友人の画家であるセザンヌである。作中でクロードがサロン展に落選したりする所は、現実にセザンヌが体験した事実である。クロードが出品した作品『外光』は、マネの「草の上の昼食」に構図は似ているが、画面に描かれた女性は、当時中傷的になったセザンヌの「モデル・オランピア」である。しかし作中でゾラを彷彿とさせる人物は、クロードの埋葬に弔辞を述べる老作家サンドーズといえよう。とまれ実現不可能な美の傑



作を創作しようと努力したクロードが、遂にその不可能を悟って自殺するこの小説は、誕生しつつあった印象派の若き画家たちの苦闘の歴史として、当時の画壇の実態を描いた注目作といえよう。なほ本書『製作』は清水正和氏の新訳により、岩波文庫として刊行されており、巻末の詳細な解説は大変に有益である。

6) *Au Bonheur des dames* (1883) : 叢書第 11 巻の作品。オクターヴ・ムーレが創業開店したデパートという新スタイルの大商店が、その地区の零細な小売店を破産させて繁栄するという、商業界の変転を描くと同時に、売子として就職したドニーズ・ボデュが、その魅力によりムーレを誘惑し、その妻になる出世物語でもある。しかも彼女は利益追求一辺倒の夫を感化して博愛主義者に变身させ、この大資本家を労働者たちを援護する慈善家にしてしまうのである。この作品は「ボン・マルシェ」や「プランタン」などのデパートが出現する流通業界の躍進を予言している。

7) *Germinal* (1885) : 叢書第 13 巻の作品。題名の *germinal* は大革命で成立した国民公会が制定した共和暦の第 7 月 (3 月 21 日から 4 月 20 日まで) で、自然が芽生えて再生する月日を指し、「芽生え月」と訳される。ゾラはこの作品で、炭鉱労働者たちの人権の回復と生活改善の実現という希望を描こうとしている。先の『奥様方の幸福』で流通業界の労働者の生活を描いた彼は『居酒屋』の女主人公ジェルヴェーズの息子エティエンヌが、理想に燃え、北フランスのノール県ル・ヴォー炭坑に職探しにやって来る所から開幕する。坑内夫として働きはじめた彼は、危険な作業に従事しながら、不当に安い賃金や劣悪な環境での苛酷な労働などの改善を要求し、仲間の労働者に呼びかけ、団結しストライキを打って、経営者側と交渉しようとする。当時の社会主義運動の発展の諸相、労働者たちの権利意識の自覚と労働意欲の覚醒が、登場人物の中に誕生していく過程が鮮烈に描写されている。主人公エティエンヌ・ランティエと石炭運びのカトリーヌとの恋や、エティエンヌとシャヴァルの争いなども配したこの作品は、敗北したストライキの後に、主人公エティエンヌを一人生きさせ、パリに出発させる結末により、社会主義的理想の現実に向って、勤勉で実直な民衆の再生を暗示しているといえよう。

8) Edouard Pailleron (1834-1899) : パリに生れパリで死んだ純粹のパリっ兒。軍人での出世を夢みて法律の勉強をやめ志願するが、すぐに自分に適性が無い事を実感して退役、スイスやイタリアを旅行し気分を転換する。1860 年に処女詩集『居候たち』*Les Parasites* を、次に第 2 詩集『愛と憎悪』*Amours et haines* を出す。諷刺の辛辣さを愛情で優しく味つけしているが、不屈の誇りこそ自分の本領だと宣言している。『居候』*Le*

*Parasite* という一幕物の韻文喜劇で演劇界にデビュー（1860年オデオン座初演）、その巧妙な筋の展開とエスプリ溢れる会話の台詞で好評を博した。1868年の韻文劇『境界壁』*Mur mitoyen*（オデオン座）、『下弦の月』*Le Dernier Quartier*（1863年フランス座初演）などで有名になったが、彼の散文劇の方が上質で、何篇かの作品があるが、特に『退屈している人々』*Le Monde où l'on s'ennuie*（1881年フランス座初演）が代表作である。この作品はモリエールの『女学者』*Les Femmes savantes* と同一主題で、セラン伯夫人のサロンに集まるベラック教授を中心とした人々が、政治、文学、科学など当時流行の話題について語り合う。作者はこの人たちの浅薄な知識、術学、偽善、虚栄心などを、上品かつユーモラスに描写しているが、ハッピー・エンドに終るこの軽妙洒脱なこの作品には、しかしながらモリエールの作品のもつ社交界人士に対する透徹した省察と精緻な心理分析や徹底した批判は無い。ベラックは当時人気のあったカロなる大学教授を巧妙に戯画化したものといわれる。劇壇の人気者になった彼は、ジャーナリズムのボスであった「両世界評論」の創設者ビュロの娘と結婚し、この雑誌の所有者の一人になる。1862年12月7日、アカデミー・フランセーズ会員に選出され、文芸サロンを開催し、文学界での栄達を果した。その後も創作を続けたが、見るべきものはない。

9) Henri François Becque (1837-1899)：パリ生れの劇作家で、19世紀のブルジョワ社会の因襲と道徳の偽善を摘発、写実主義演劇の建設者として、また演劇における自然主義の代表者として、アントワープの自由劇場の創立に参加している。劇作家として成功するまで、鉄道員、小役人、株屋の店員などを転々とし、その間に創作した劇作もなかなか上演の機会が得られず、何度も苦い挫折を味あわされた。特に普仏戦争後に発表した『誘惑』*L'Enlèvement*（1871）は大失敗、このためベックは自信を失い、78年まで劇作執筆を断念、「人民」紙 *Le Peuple* の演劇担当記者として批評活動をしている。1878年の『梭』*Lavette*（ジムナズ座）。『堅気の女たち』*Les Honnêtes Femmes* でまずまずの成功を得て自信を回復、彼の代表作であり自然主義演劇の傑作4幕の散文劇『からすの群れ』*Les Corbeaux* を発表する（1882年9月14日、フランス座初演）。85年には『パリの女性』をルネサンス座で上演し、劇作家として不動の地位を確立した。

彼の作品は、当時の社会的実現の一断面をあるがままに舞台上に再現し、鮮烈に描かれた性格を持つ登場人物たちは、単純明快な劇の展開に沿って構成された世界に生きている。現実にはありそうもない複雑し錯綜した筋をもつスクリーブの作品や登場人物が道徳的モデルのようなデュマ・フィスらの作品と明確な一線を劃している。普仏戦争敗戦後の第3

共和政発足初期の混沌とした激動の暗い日々の日常をそのまま上演した彼の作品は、ベックの厭世思想と人間不信が濃厚に反映され、その痛烈な偽善に対する批判に対し、一般観衆、特に支配階級のブルジョワ達から悪罵を浴びた。彼らは登場人物に自分たちの内に秘められている醜悪な利己を摘発され、白日の下に暴露されたからである。ベックには劇作以外にも、『一劇作家の思い出』*Souvenirs d'un auteur dramatique* (1895)、『演劇研究』*Etude sur l'art dramatique* (1926) などがあり、作品は全集全7巻 (1924-26) として刊行されている。

10) Alexis Emmanuel Chabrier (1841-1894) : フランスの作曲家。ピュイ・ド・ドーム県アンベール生れ。パリに上京し、象徴派の詩人たちや印象派の画家たちと交際し、音楽家たちとはパリ音楽院教授だったセザール・A・フランク (1822-1890) を中心としたグループと交流し、パリ音楽界に知己友人を得た。指揮者のシャルル・ラムルー (1834-1899) の助手として彼の交響楽団の編成や演奏に協力した。ワグナーから深い影響を受け、自由なリズム、色彩感、ライトモチーフの使用などに特色を發揮した。これらの手法は後のドビュッシーやラヴェルら印象派の作品に影響を与えた。代表作は歌劇『心ならずも王になり』*Le Roi malgré lui* (1887) で、その他に歌劇『星』*L'étoile* (1877)、『グェンドリーヌ』*Gwendoline* (1886) などがある。

11) Gabriel Urbain Fauré (1845-1924) : スペイン国境に接する南仏アリエージュ県バミエール出身。パリのニーデルマイヤー音楽院でサン・サーンズらに学び、アイラウのサン・トノレ教会、次にパリのサン・シュルピス教会のオルガニストとなった。母校ニーデルマイヤー音楽院教授に就任、国民音楽協会の創立に参加した。1877年にパリのマドレーヌ寺院指揮者、1892年に美術監督官、1896年にパリ音楽院教授、1905年に同校校長に就任した。彼の死は国葬となった。その洗練され繊細な作風はフランクとドビュッシーの中間にあって、象徴派音楽の創造者の一人といえる。1882年の『鎮魂曲』*le Requiem* は宗教音楽の傑作とされる。歌劇『ペリアスとメリザンド』(1898) 他、ピアノ曲、歌曲を多く創作した。

12) Alexandre César Léopold, 通称 Georges Bizet (1838-1875) : パリ生れの作曲家。パリ音楽院でアレヴィエ (1799-1862) に学び、優等生としてローマ大賞を獲得し (1857)、ローマに留学、帰国後に抒情的作品『真珠採り』*Les Pêcheurs des perles* (1862)、『美しきペルトの娘』*La Jolie Fille de Perthe* (1866) を発表した。次にドーデの短篇を音楽にした『アルルの女』*L'Arlésienne* (1872) とメリメの中篇を題材とした

歌劇『カルメン』 *Carmen* (1875) を発表する。ところが自信を持って発表した『カルメン』の初演は大失敗に終り、この事が彼の死期をはやめたといわれる。しかしニーチェはその作品のもつ「アフリカの」陽気さと「ワグナー的の霧」に対立する「清澄さ」を高く評価した。やがてビゼーの作品の持つエキゾシズムの魅力、躍動するリズム、緻密巧妙な作曲法は次第に理解され、現代ではこれらの作品いずれもフランス音楽史上の傑作として、全世界で演奏されている。

13) Marie Eugène Henri Fouques Duparc (1848–1933) : パリ生れの作曲家。セザール・フランクの愛弟子で、国民音楽協会の創設にも参加した。交響詩『レオノーレ』 *Léonore* (1875) の他、ボードレルの『旅への誘い』 *L'Invitation au voyage*, シュリ・プユリドムの『ため息』 *Soupir*, ゴーチエの『嘆き』 *Lamento* などの詩を作曲した歌曲が有名である。彼は精神を病んで 1885 年以降は全く作曲せず、スイス次にピレネー地方に隠棲して死去した。

14) Ernest Chausson (1865–1899) : フランスの作曲家。パリ音楽院でマスネやフランクに学び、国民音楽協会の書記を務めた。室内楽に才能を示し、印象派の特色を出している。デュパルクと同じ歌曲も作曲しているが、代表作はヴァイオリンと管絃楽のための『詩』 *Poème* (1891), 歌劇『アルテュス王』 *Le roi Arthur* (1903) があげられる。

15) Paul Abraham Dukas (1865–1935) : パリ生れの作曲家。パリ音楽院でローマ大賞第 2 番に入る (1888)。やがて母校とエコール・ノルマルの教授となり、多くの俊秀を育成した。ワグナーの影響を受け、色彩溢れる管絃学法と劇的構成を持つ作風は、同じ印象派でもドビュッシーの作風とは対極をなしている。最も有名な作品は、ゲーテのバラードを交響曲にした『魔法使の弟子』 *Zauberlehrling* (1897) である。その他に歌劇『アリアーヌと青髭』 *Ariane et Barbe-Bleue* (1907) やピアノ曲がある。

16) Achille Claude Debussy (1862–1918) : パリ郊外のサン・ジェルマン・アン・レー生れの作曲家。小売商人の子で 11 歳でパリ音楽院に入学 (1873), 1884 年にカンタータ『蕩兒』 *L'Enfant prodigue* でローマ大賞を得た。これ以前、チャイコフスキーの後援者メック夫人に同伴、スイス、イタリアを旅行、さらにモスクワの夫人宅に滞在し、ムソルグスキーらのロシア音楽に感銘している。マラルメのサロンで象徴派の詩人たちや印象派の画家たちと交流、新思潮の息吹きに接した。マラルメ作の『牧神の午後』を題材にしたその『前奏曲』 *La Prélude à l'après-midi d'un faune* (1892) で印象主義の作風を確立する。簡潔なタッチで外界の自然の色彩と雰囲気をも慎重かつ暗示に富む手法で音楽に盛り

込む、という新しい印象派の芸風を確立したのである。楽壇の保守派からの非難中傷にもめげることなく、彼は音楽革新の道を前進した。歌劇『ペレアスとメリザンド』*Pelléas et Mélisande* (1902) に対する攻撃も彼は無視している。彼の名声はフランスよりも海外で高く、オーストリー、ハンガリー、イギリス、ロシア各国に招待され、自作の指揮を取っている。印象主義音楽の開祖として、今日、彼の評価は定まっている。

17) Henri Bergson (1859-1941) : パリ生れのフランスの哲学者。1878年にエコル・ノルマルに入学、1881年に教授資格所得、『意識の直接所与についての試論』(1889)で文学博士となる。各地のリセで哲学を教え、やがてパリのアンリ4世校に着任(1890-98)、1898年に、エコル・ノルマルの専任講師、1901年にコレージュ・ド・フランスの教授に就任した。スペンサー(1820-1903)の影響を受けたベルグソンは経験論と進化論に立脚し研究をすすめた。彼は知性によって認識される時間は外的なものにすぎず、真の時間は持続する「生命」こそが内的時間であるとする。生命が物質と闘って変化していく過程で、動物的本能と人間的知性に分化し、「生命の飛躍」により直観を獲得し、社会を進歩させ、道徳と宗教を成立させると主張した。ベルグソンの哲学は、自我の根底に存在する自由の探究と解明にむけられている。このため20世紀初頭の若き知識階級からは、決定論のドグマを破壊し解放してくれる新しい宗教的尖光に映じたのである。ベルグソン自身も「生命の飛躍」から「自由なる神」の観念に傾斜していき、キリスト教に接近していったが、ユダヤ教徒としての一線を越える事はなかった。

18) Claude Bernard (1813-1878) : ローマンサン・ジュアン生れの生理学者。葡萄園主の家に生れ、16歳の時から既にリヨンの薬局で薬剤師見習いとして勤務、一時劇作家を夢みるが、パリに上京して医学生となり、1843年に医学博士となる。肝臓のグリコーゲン形成作用の発見により(1854)、科学アカデミー会員となり、彼のために新設されたパリ大学の一般生理学の教授に迎えられ、翌55年にはコレージュ・ド・フランスの教授に就任した。比較生理学教授として、1868年にはアカデミー・フランセーズ会員に選出された。1865年に彼は自分の医学に関する基本的著述『実験医学序説』*L'Introduction à l'étude de la médecine expérimentale* を発表、実験的方法の使用により、医学もまた近代科学になりうると主張した。この名著は医学界のみならず、一般社会人にも感動を与え、ゾラがこの著書を手本にして自然主義の小説論である『実験小説論』*Le Roman expérimentale* (1880) を書いた事は、文学史上つとに有名である。ベルナルは肝臓機能の解明の他にも、膵臓の分泌液が消化作用のある事も確認し(1848)、内分泌 *sécrétion*

interne なる学術用語を創造している。近代医学の開祖の一人として評価されている。

19) Louis Pasteur (1822-1895) : フランス東部スイスの国境に接するジュラ県ドールの出身。ナポレオン軍の老兵だった皮なめし職人の子。1843年にエコル・ノルマルに入学、46年に教授資格を、47年には理学博士を取得、ディジョンの高校物理学教師をふりだしに、ストラズブール大学、リール大学を経て、母校エコル・ノルマルの科学研究指導教授に就任した(1857-67)。1862年に科学アカデミー会員、次にパリ大学教授(1867-75)、1868年にはエコル・ノルマルの生化学実験所長、いわゆるパストゥール研究所の所長に任命された。リール大学に在職した間(1854-57)、醗酵現象の解明にあたり、醗酵の原因が微生物である事をつきとめ、乳酸菌、酵母菌を発見した。1865年には自分の先生だった J-B Dumas の要請により南仏のアレスを訪問し蚕病の原因を探究、病源であるウィルスを発見しフランスの養蚕業を隆盛に導いた。これは前記の乳酸菌の発見により空気と微生物との関係を考慮して、葡萄酒やビールの低温殺菌法を確立し、大量の腐敗からこれらのアルコール飲料を保存した功績に匹敵する。これ以後パストゥールは各種の伝染病の研究に従事。順次その病原菌を確定してその予防法を確立していく。炭疽病のワクチンを発明し、鶏コレラや豚丹毒の予防ワクチンも開発した。最後に、1880年以来、多くの実験を犬に行ってきた狂犬病予防ワクチンを人体に注射して、その有効性を実証した。1885年7月6日の事である。最初にこのワクチンを注射された人物はアルザス出身の Joseph Meister という。1888年、国の援助によりパストゥール研究所が創設され、彼がその所長に任命された。

20) rue Dutot : 第15区にあり、ヴォロンテール街とアレ街を結ぶ長さ375米、幅20米の通り。この通りには1876年にアレ広場とプロセシオン街との間に開通し、1878年にマチュラン・レニエ街まで、次に1883年にパストゥール大通りまで順延されたが、1934年にその一部がルー博士街となった。

21) rue de Vaugirard : 第6区と第15区を通る。サン・ミッシェル大通りとルフェーブル大通りを結ぶ長さ4.360米、幅15から22米の通り。現在パリで最長のこの通りは、リュテシアとドルーを結ぶローマ時代の古道である。1860年までパリ城内にあったヴォジラール街と、入市税の徴税請負人の柵門の外にあったヴォジラール村の大通りが1868年に合併して出来た。これらの道の最初の部分は、フィリップ・オーギュストやシャルル5世の城壁の外にあった外堀の通りとヴォジラール柵門を結んでいた。この柵門は現在のパストゥール大通りと出会った地点にあった。この通りに沿って多くの名所旧跡がある。

15 番地にはリュクサンブール宮があり、現在は上院がおかれているが、大革命時代は牢獄として使用され、ジロンド派をはじめ 800 名以上が収容され、その 1/3 以上が断頭台で処刑されている。70 番地はカルメル派の修道院とサン・ジョゼフ教会がある。教会は大革命時代にやはり牢獄となり、アルル大司教やボーヴェやサントの司教らの高位聖職者らが監禁され、1792 年 9 月 2 日から 4 日にかけて、115 名の司祭らと共に虐殺された。183 番地はかつてのヴォジラル村の大通りだったが、道幅は現在の道幅の半分くらいだった。この辺一帯はサン・ジェルマン・デ・プレ大修道院の所有地で、緑豊かな肥沃な谷間だった。1256 年大修道院の司祭ジェラルド・ド・モレが、病氣療養中の修道士のため別荘を建設した。このため小さな村落が発展したという。住民たちはこの療養所を Val Gérard と呼んだが、それがやがて Vaulgérard, Vaugirard になった。

22) rue d'Aassa : 第 6 区にあり、シェルシュ・ミディ街とオプセルヴァトワール大通りを結ぶ長さ 1.190 米、幅 12 から 15 米の通り。この通りがカルメル派修道院の跡地に一部開通したのが、1798 年のことであった。1806 年に開通するが、その名はヴォルテールも賞賛している英雄ジュヴァリエ・ダサに因んで命名された。1868 年に現在の通りになった。21 番地に 1875 年にアンスティテュ・カトリックとカルメル派神学校が創設されている。

23) Edouard Branly (1844—1940) : アミアン出身の物理学者。ソルボンヌ大学研究所次長 (1875)、パリ大学教授 (1876)、パリのアンスティテュ・カトリックの教授。ドイツの物理学者ハインリッヒ・ヘルツ (1857—1894) が実証した電磁波を検出するのに便利な検波器 cohéreur を発明し (1890)、これがイタリア人の電気技術者 M. マルコーニ (1874—1937) によって利用された。彼はヘルツの電磁波に基づき実験を重ね、無線電信装置を発明したが、この世紀の大発明もブランリの功績が大である。

24) Pierre Curie (1859—1906) : パリ生れのフランスの実験物理学者、化学者。最初は結晶学と磁気に対する温度の効果を研究し、1883 年に水晶の圧電気を発見した。パリ理工科大学教授アントワヌ・アンリ・ベクレル (1852—1908) がウラン塩から一種の放射線が出ている事を発見した事に興味を持ち、キュリーは妻マリと共に放射性物質の研究に転進、瀝青ウラン鉱からラジウムとポロニウムの分離に成功した (1898)。キュリー夫妻はベクレルと共にノーベル物理学賞を受賞した (1903)。翌 4 年にソルボンヌ大学の物理学教授に就任したが、その 2 年後に馬車の事故で急死した (4.19.)。彼の後任に妻マリが就任した。

25) Marie Curie, 旧姓 Maria Sklodowska (1867-1934): ワルシャワ生れのフランスの女流物理学者, 化学者。政治活動のためパリに亡命, キュリーと結婚 (1895), 夫と共にベクレルの研究に注目し放射能の研究に没頭, ラジウムとポロニウムを発見 (1898), 放射能元素の存在と原子の自然崩壊の事実を証明し, 原子物理学の創成に貢献した。夫とベクレルと共にノーベル物理学賞を受賞したのは前述の通り。夫の死後, ソルボンヌの教授として金属ラジウムの分離に成功, ノーベル化学賞を受賞した (1911)。

26) boulevard Kellerman: 第 13 区にあり, ポルト・ディタリア大通りとポルト・ド・ジャンティイ大通りを結ぶ長さ 1.200 米, 幅 40 から 50 米の大通り。この道は昔はティエールが構築した要塞群をめぐる円周道路で, ミリテール街の一部だった。1864 年にフランス陸軍元帥でヴェルミー公爵のフランソワ・ケレルマン (1735-1820) の名をとって命名された。

27) rue de la Glacière: 第 13 区にあり, ポール・ロワイヤル大通りとトルビャック街を結ぶ長さ 1.275 米, 幅 18 米の道。一部は昔のジャンティイ村の村道だった。この地帯にビューヴル川が多く沼や池をつくり, 冬になるとそれらが凍結し, パリ市民たちの恰好のスケート場になったためこの名 (「氷室」glacière) がある。24 番地の家に, キュリー夫妻が住んでラジウムを発見した (1898) 旨の碑銘板がある。

28) Antoine Henri Becquerel (1852-1908): パリ生れのフランスの物理学者。祖父アンワヌ・セザール (1788-1878) も優秀な物理学者で光電池を発明 (1839), 電信機の発展に寄与している。孫の彼も祖父と同じ学問の道に進み, パリのエコル・ポリテクニク (理工科大学) の教授 (1895 以来) として, 1896 年にウラン塩からの放射能を発見, キュリー夫妻と共に放射能研究の先駆者となった。彼はその他にも燐光, 螢光, 光の偏光, 磁気なども研究し, キュリー夫妻と共にノーベル物理学賞を受けた (1903)。

29) rue Lhomond: 第 5 区にあり, エストラバード広場とアルバレート街を結ぶ, 長さ 578 米, 最少幅 6 米の通り。この道は 15 世紀に「陶器製造所」Poteries と呼ばれた囲い地を通して造成された。陶器の事は, ガロ・ロマン時代にサント・ジュヌヴィエーヴの丘で製作されていた陶器の記憶である。そのため 1867 年まで rue des Pots とか rue des Postes とか呼ばれていたが, 文法家 Charles Lhomond (1727-1794) の名がつけられた。10 番地から 26 番地にかけてあったイエズス会経営の有名な学校の跡地に, 1933 年にキュリー病院とエコル・ノルマルの附属研究所が建設されている。18 世紀の初頭にこの 10 番地に住んだフラヴァクール侯爵の妻オルタンス・フェリシテはネール侯爵ルイの



娘だった。彼女の3人の姉はいずれも国王ルイ15世の愛人になっていたが、夫のフラヴァークール侯は妻に向って、もし姉たちのように国王の愛人になったら容赦しないぞ、と脅迫したといわれる。侯爵邸は大革命時代に政府に没収され、侯爵夫人は一時拘留されるが1794年に釈放、5年後の99年に死去した。邸は学校になったが、1854年にサント・ジュヌヴィエーヴ校に統合された。

30) Jules César Janssen (1824–1907)：パリ生れの天文学者、物理学者。1876年にモンマルトルに気象台を設置、翌77年にムードンに移転し、天台観測にあたった。彼は1893年にモン・ブラン山頂の気象台建設を指揮し、完成後はその台長を務めた。彼は太陽光線が地上吸収線の源である事を発見(1862)、1868年の日蝕観測の時、太陽の紅炎のスペクトルの中に地上に存在しないそれまで未知の光線を識別し、またそのガスをヘリウム *hélium* と命名した。イギリスの化学者ウイリアム・ラムゼー(1852–1916)も大気中にヘリウムを発見している(1894)。ジャンセンはまた高速度撮影を利用して金星が太陽の前を横断している場面の撮影に成功し(1874)、更に彗星の最初の撮影にも成功した。

31) Jules Emile Péan (1830–1898)：ガルバルディヤナポレオン3世の侍医として有名な外科医オーギュスト・ネラトン(1807–1873)の愛弟子で、世界で最初に幽門切除を実施(1879)、膈からの繊維種の摘出手術を行うなど、外科手術の技術の進歩を実現、また多くの手術機具を創作した。特に止血用の鉗子「ペアン式鉗子」は有名。

32) rue de la Santé：第13区から第14区に通じる通りで、ポール・ロワイヤル大通りとグラシエール街を結ぶ、長さ1.280米、最少幅10米の通りで、一部は昔のジャンティイ村道の一部である。現在の通りとして完成したのは1863年で、アンヌ・ドートリッシュが創立した病院 *Maison de Santé* に因む。9番地にペアンの創立したペアン病院がある。彼の願いからあらゆる公共機関から独立した病院で、1893年1月22日に落成、国際病院 *hopital international* と命名されたが、やがて創立者の名を名乗るようになった。42番地には有名なサンテ刑務所がある。1867年に完成したこの刑務所は最初500の独房だけだったが、順次拡張され、1900年には14区劃の内部に2.000名を収容した。5棟の建物は中心の監視棟から扇状に配置された5階建てで、独房は幅2.5米、奥行き4米、高さ3米だった。最初は未決囚や釈放間近かの囚人を収容していたが、最後は死刑囚も収容するようになった。

33) Gabriel Lippman (1845–92)：皮なめし職人の息子に生れ彼は科学的研究を志し、エコル・ノルマルに入学するが教授資格試験に失敗、ドイツに行き化学を勉強、ハイ

デルベルグで博士号を取得、帰国後、ソルボンヌの物理学研究所に入り、間もなく博士号を取得、パリ大学の実験物理学教授に就任した（1883）。彼は電気毛管現象の研究を完遂し、毛細管電位計を発明した。また投射光線の干渉を応用してカラー写真の造成に成功した。1908年にノーベル物理学賞を受賞した。

34) 兄 Anguste Lumière (1862–1954), 弟 Louis Lumière (1864–1948) : ブザンソン生れの化学工業家、発明家。兄オーギュストは医学を学び、化学者、生物学者として一生を過ごし、硫酸マグネシウムの役割を解明した。彼は自分の化学的知識を弟ルイに提供し、その事業の発展に寄与している。ルイは音楽家にさせようとした父の要請でピアノを学んだが、写真家としての父の家業を助けるために音楽学校に入学する以前に工業学校で学んだ知識を活用し、写真の材料や化学薬品製造に乗り出した。1894年に「映写機」cinematographe を発明、映画史上最初の活動写真 *La Sortie des usines Lumiere* を上映した。パリでの公開は、1895年12月29日の事で、ラ・シオタ駅の列車の到着風景や水を撒く散水車などの短い場面が撮影されている。上映時間20分で料金は1フラン、初日の売上げは35フランだった。パリはカプシーヌ大通りのグラン・カフェの店内だった。科学アカデミーに弟は1919年に、兄は1928年に入会できた。

35) Marie Edme Patrice de Mac-Mahon, duc de Magenta (1808–1893) : 陸軍元帥で政治家。アイルランド系の王統王朝主義者の家に生れ、1827年に陸軍に入隊、アルジェリア遠征で軍功をたて、1848年のクリミア戦争ではマラコフ要塞占領(1855.9.8)で有名になった。1859年に第2軍団を指揮しイタリア戦争に参加、オーストリー軍をマジヤンタに破り(1859.6.4)、ナポレオン3世から陸軍元帥とマジヤンタ公爵に叙せられた。アルジェリア総督を務めた(1864)後、普仏戦争には第1軍団司令官として参加したが、スダンの会戦で敗北した(9.1.)。彼はこの戦闘で腿に重傷を負い、指揮をデュクロ將軍(1817–1882)に委譲しなければならなかった。その上、彼自身プロシャ軍の捕虜になってしまう。平和条約の締結後に釈放された彼は、ティエールと協力し、ヴェルサイユ政府軍を指揮し、パリ・コミューヌを仮借無く弾圧、その軍功によりティエールの後任として第3共和国大統領に就任した(1873–79)。戦場での英雄でも、政治にはほとんど経験のなかった彼は、議会対策などをブロイ公(1821–1901)に一任せざるを得なかった。ブロイ公は王党派とオルレアン派の融和に努力、王政復古の実現に努力するが、王位継承者のシャンボール伯の強硬な主張を変える事が不可能と判断し、統一の夢を捨てる。その代り、大統領の権限強化を目指し、大統領の任期を7年に延長する法案を成立さ

せた (1873.11.17.)。王政復古の希望を捨て切れなかったマク・マオンは次第に勢力を増大してくる共和派を押しやうとして、自分が任命した穏健な共和主義者のジュール・シモン首相を罷免し (1877. 5. 16.)、王党派のプロイ公に組閣を命じ、上院の承認を得て下院を解散し総選挙を断行した。官選候補を擁立し猛烈な選挙戦を展開したが、共和派の勢力を僅かに減少させたにすぎなかった (共和派 318 名対王党派 208 名, 1877.10. 28.)。プロイ公の辞任の後、マク・マオンは戦友であったロシュブエ将軍 (1813-1899) に 10 月選挙後の組閣を命じたが、閣僚に一人も議員もいないこの超然内閣を下院は否認し、内閣は 1877 年 12 月 13 日に僅か 20 日間で消滅した。マク・マオンは後任の首相に共和派のアルマン・デュフォール (1798-1881) を任命せざるを得なかった。1879 年 1 月の上院の部分選挙で王党派が過半数確保に失敗し、共和派の勝利をつきつけられ、マク・マオンも遂に大統領を辞任した (1879. 1. 30.)。自己の保身や私利のための解散権の行使は、政治の混乱と行使した大統領への正義の判決を下す、という教訓をマク・マオンが示した。これ以後、第 3 共和政の大統領で下院の解散を実行した者は一人もいない。

36) Théâtre du Gymnase : 1820 年、ゲルシーとルーヴジャンの設計監督の下に、旧ノートル-ダム-ド-ボンヌ-ヌーヴェル墓地の跡地に建設された。現在のボンヌ-ヌーヴェル大通り 38 番地である。正式名称は Gymnase-Dramatique (敢えて訳せば、演劇練習場) で、国立演劇学校の学生や卒業したばかりの新人が、演技実習を兼ねた公演のための劇場であった。また同時にコメディ-フランセーズとオペラ-コミック座の下部劇場にもなっていた。1820 年 12 月 23 日が柿落しであった。この劇場を一流劇場にしたのが、1830 年からの名支配人ルモワヌ・モンティニで、彼は名作と有能な新人発掘の名人であった。名女優ラシェルも初舞台はこの劇場で、1837 年 7 月 24 日初演『ヴァンデの女』*La Vandéenne* でデビューした。

37) Edmond Rostand (1868-1918) : マルセーユ生れの劇作歌。処女作の劇『赤い手袋』*Le gant rouge* (1888) を発表後、詩集を出版 (*Les Musardises*, 1890 ; *Pour la Grèce*, 1897), 次に 3 幕の韻文喜劇 *Les Romanesques* (1894) がコメディ-フランセーズで上演され、ロマンチックで甘美な作風が自然主義全盛の当時の演劇界で注目された。中世の伝説を題材にした詩情溢れる軽喜劇『遠国の姫君』*La princesse lointaine* (1895), 聖書から着想を得た『サマリアの女』*La Samaritaine* (1897) は、いずれも当時の人気女優サラ・ベルナルにより上演され注目された。しかし彼の名を不朽のものにしたのは『シラノ・ド・ベルジュラック』*Cyrano de Bergerac* (1897) である。1897 年 12 月 27

日、ポルト・サン・マルタン座で初演の幕をあげたこの名作は、この劇場の支配人でもあった名優ブノワ・コンスタン・コ克蘭（1841-1909）の名演により1年半に及ぶ驚異的大成功を博し、フランス演劇史上の傑作となった。また1900年には、ナポレオン1世の遺児ライヒシュタット公フランソワ・シャルル・ジョゼフ・ボナパルト（1811-1832）の悲運の生涯を描いた『鷲の子』*L'Aiglon* は、サラ・ベルナールの熱演によって、特に女性観客の紅涙をしばらせたのである。フランス・ロマン主義演劇の本流たるユゴーの作風を継承し、豊麗な映像と甘美な抒情、巧緻なプロット、闊達明朗な登場人物の活躍する舞台で、現代でも衰えぬ人気を保持している。

38) *Affaire de Panama* : 第3共和国における最大の経済的政治的スキャンダル。発端はリュシアン・ボナパルト（1775-1840）の孫ウイリアム・ボナパルト・ワイズ（1826-1892）らがコロンビア政府からパナマ地峡に運河を建設したならば、その年から99年間の租借権を得た事から始まった（1878. 5. 28. 付の条約）。彼らはスエズ運河掘削に成功したフェルディナン・レセプス（1805-1894）にこの新運河建設の会社に参加してもらい、工事の完成を願ったのである。この時すでに70歳を過ぎていたレセプスは彼らの懇願と成功の暁に再び得るであろう栄光につられ、この事業に参加した。彼はパリで資金集めのため国際会議を開催し、有望な新事業への投資を募った。スエズ運河建設の成功者としての彼の名声のお蔭で、資金は順調に調達でき、いよいよ工事が開始された。しかし初期の見込みは大きくはずれる。予想以上に掘削困難な地形と、悪性の猛烈な風土病により多数の労働者が死亡するなどの悪条件が重なり、工事は進捗せず、資金が枯渇してしまう。この事業を宣伝するために新聞を利用して展開したキャンペーンにも多大の費用がかかっていた。苦境を打開するため、レセプスは、「富くじ付公債」を発行して広く一般庶民からの資金調達を考案し、公債の発行を許可する法律の制定に努力してもらうため、政界に働きかけ、閣僚や議員に運動資金の名目で買収工作を行った。その甲斐あって「富くじ付公債」の発行を認可する法律が成立したが（1888. 6. 9. ）、その時は既に遅く、パナマ運河会社は破産し（1889. 2. 4. ）、多くの小株主が被害を蒙ったのである。その数は凡そ85,000人という。

会社の破産にまつわる不正経理と買収工作は、関係者を抱えた政府の種々の工作により秘密にされていたが、1892年9月3日にエドワール・ドリュモン（1844-1917）が「*リーブル・パロール*」紙上で、レセプスを中心とするパナマ運河会社首脳と経済界や政界の大物たちの不正な関係を暴露し糾弾し、また御用新聞となった有力紙を非難した。ここに至っ

て政府も遂に疑獄の解明のための調査委員会を設置した。11月に「リーブル・パロール」紙は、政界工作の中心人物だったユダヤ人実業家レイナック男爵から入手した買収議員名を公表した。自分の名を出さない条件でリストを手渡したレイナックは自宅で死亡しているのが発見された(1892,10.19.)。会社の重役の中には国外逃亡した者もでる。裁判には多くの被告が出廷したが、政治絡みのスキャンダル裁判の例にもれず、有罪になった者は少数で、レセブスが懲役5年、息子のシャルルが同じく2年、レセブスの懇願により技術面に協力したエッフェルも同じく懲役2年を宣言されたが、刑の執行は停止され、時効により入獄は免れた。大蔵大臣ルーヴィエ(1842-1911)は辞任している。パナマ運河事件は、多くのユダヤ人実業家が関係していたため、反ユダヤ主義を勢いづかせた。また議会の腐敗が政治不信を招き、事件に連坐したとみられたクレマンソーらの急進派が退潮、1893年の9月選挙では穏健派共和派が勝利する。彼らは進歩派と呼ばれ、ドレフュス事件が勃発するまで政権を握った。

39) チャリティー・バザーの火事：第8区にあるジャン・グージョン街15番地から17番地にあった建物で、困窮者への援助のための資金を得ようと、恒例のバザーが開催されていた(1897.5.4.)。1,200名の観客が当時の最初の娯楽だった映画の上映を見物するため、この建物の一室に集まっていた。上映中に映字機のランプが突然爆発し、火が忽ち燃え広がり、狭い室内に寿司詰めになっていた観客に多数の死傷者がでた。死者の中には、オーストリー皇后の妹アラン公妃も含まれた。死者135名、負傷者250名だった。

40) Jean Louis Barthou (1862-1934)：バス・ピレネー県オロロン・サント・マリ生れ。ポー市で弁護士を開業、1889年から同県選出の代議士として穏健共和派の中心人物として活躍、第2次デュピュイ内閣の公共事業相(1894-95)、メリーヌ内閣の内相(1896-98)、クレマンソー内閣の公共事業相(1906-09)。ポアンカレ大統領により首相に任命された(1913.3.-12.)。熱烈な愛国者であり、対独復讐の強固な意志を持った彼は、急進派や社会主義者の反対を押え、兵役の3年延長法案を成立させた(1913.8.7.)。これにより17万名の現役兵増員が実現した。共和派の保守派のリーダーとしてパンルベ内閣の国務相ついで外相として首相を支えた(1917)。ポワンカレ内閣の法相として(1922)、賠償委員会委員長についてジュネーヴ軍縮会議首席代表に就任(1922-26)、ドイツの要求に対し非妥協の強硬姿勢を変えなかった。ポワンカレ内閣で法相に再任(1926-29)、ステーク内閣の陸相(1930)、ドゥメルグ内閣の外相(1934)として、ドイツの侵略を阻止するためロシアとポーランドなどの諸国を含めた東ヨーロッパ協定の締結、フ

ランス・ソ連邦同盟を実現しようとした。親善友好のためユーゴスラヴィア国王アレクサンドル1世をマルセイユに迎えた時、クロアチア分離独立運動派のテロリストのヴラダ・チェルノゼムスキーが国王の乗用車に駆け上り、拳銃で国王を射殺した。歓迎委員として同乗していたバルトゥーも暗殺犯の銃弾に倒れ、病院に急送中に絶命した(1934.10.9.)。享年72歳。文学者としても有名で、アカデミー・フランセーズの会員(1918)でもあった。

41) Léon Marie Bloy (1846-1917) : フランス南西部ドルドーニュ県の県都ペリグー市の出身。18歳の時パリに上京、下級官吏の職に就くが、烈しい独立心が出世の妨げとなった。1869年バルベール・ドールヴィイを知り、彼の感化で熱心なカトリック信者になる。普仏戦争に従軍、戦争の惨禍に深刻な影響を受けた。1873年からパリに定住、生活は貧しかったが、何人かの親友、ヴィリエ・ド・リラダン、エロ、ブルジェと交流した。1877年にタルディフ・ド・モアドリー神父から聖書の神秘主義的解釈を教示され、ラ・サレト山上の聖母出現を信じるようになる。(イゼール県グルノーブル郡にある高さ1770米の山。山上にノートル・ダム・ド・ラ・サレト礼拝堂があり、巡礼地の一つ。1846年に2人の羊飼の青年の前に聖母マリアが出現したという。) 回心した元売春婦で幻視者のアンヌ・マリ・ルーレと知り合い同棲(1878-82)、終末思想と聖霊降臨の信念を得た。ルーレは後に狂死している。彼は物質主義に汚れたこの世に神の約束が啓示されるが、その予言者になることこそ自分の真の使命である、と確信する。彼は当時の人気カフェ「黒猫」le Chat Noirに通い、作家やジャーナリストと交際していたが、半自伝的小説『絶望した男』*Le Désespéré* を発表(1886)、内容のあまりの人間不信、文壇痛罵から、文学界からのボイコットを恐れ、名のある出版社はいずれも出版を拒否した。しかしプロワの理解者であった貧しい新聞販売業者が、現代社会に断じて順応しない作者の態度に魅了され、出版を承諾した。この作品はプロワの作家的名声を確立したが、同時に文壇からは黙殺され、これ以後プロワは文学界の孤兒になってしまう。「恩知らずの乞食」le Mendiant ingrat とは、その後の彼の自称である。しかし孤独な反骨のこの作家は、1890年に結婚したデンマークの詩人の娘ジャンヌ・モルベックの暖かい愛情や、彼が信仰に導いた優秀な弟子たち、ジャック・マリタン夫妻やヴァン・デル・メールらの尊敬に包まれて、壮年時の激烈な論争の時とは正反対な、安穏で静謐な晩年を送ることができた。彼は多くの作品を残したが、聖霊による第3の統治を期待した『ユダヤ人による救い』*Le Salut par les Juifs* (1892)、普仏戦争の体験を描いた『血の汗』*Sueur de Sang* (1892)、『貧しい

女』 *Le Femme pauvre* (1897), 『恩知らずの乞食』ではじまる全8巻の日記などがある。

(続 く)

(追 記)

- (1) 参考図書などは, [I] の巻末に掲載してありますので, そちらを御参照下さい。
- (2) 前稿 [XXVIII] に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p. 8. 下から 14 行目 Grevvy

p. 23. 上から 3 行目 有名な

p. 23. 下から 8 行目 Manet

— 2009. 5 .29. —